



Title	<書評>瀬川昌久・川口幸大編, 『<宗族>と中国社会—その変貌と人類学的研究の現在』, 風響社, 2016年
Author(s)	賈, 玉龍
Citation	年報人間科学. 2017, 38, p. 69-73
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/60458">https://doi.org/10.18910/60458</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 〈書評〉

瀬川昌久・川口幸大編

『〈宗族〉と中国社会—その変貌と人類学的研究の現在』

風響社 2016年

賈玉龍

本書は科研費・基盤研究(C)「現代中国社会の変容とその研究視座の変遷—宗族を通じた検証」(平成24-26年度、研究代表者：瀬川昌久)をもとに、2014年の第48回日本文化人類学会研究大会の分科会「宗族研究展望—古典的研究対象の現在を再考する」を経て上梓された論文集である。執筆者の中に二人の編者をはじめとして、1980年代の中国改革開放期以降、比較的早い段階で中国大陸での現地調査を始めた研究者と、2000年以降新たに調査を始めた研究者が両方いるということが特徴的である。異なる研究視座を持つ研究者が揃うということは、「(1) 宗族を取り巻く中国の社会状況の変化、(2) 人類学的パラダイムならびに研究者の問題関心の変化〈中略〉という二つの変化を総括し、客観化して記述する」(pp.2-3) という本書の目的に照らして興味深い。

本書のテーマは中国の宗族であるが、対象とする地域は宗族研究の本拠地である中国東南部の福建・広東省から中部の湖北省、東北部の遼寧省にまで広がっている。また、本書で取り上げられている事象は、親族組織の分析から宗族における人物呼称、地域住民と外来者の関係、移民と宗族の関係などと多岐にわたっている。中国の社会状況の変化と、研究者の問題関心の変化という二つの変化を総括し、客観化して記述しようとする意図が目次にも反映されている。ここで、まず各章の内容を簡潔に紹介しよう。

1章「宗族研究史展望」では、編者の一人である瀬川は草創期から現在までの宗族研究の流れを紹介する。瀬川は香港や中国広東省を主なフィールドとする人類学者で、華南地域の宗族とエスニシティに関する多数の業績があり、日本人類学における宗族研究の第一人者ともされている。彼は前著(瀬川2004)ですでに親族研究の枠組みで宗族研究史をレビューしたため、1章では主に宗族を対象とする研究を整理している。20世紀初頭から1940年代までの研究者は、概して宗族を中国社会の特色として捉え、宗族に代表される家族・親族の紐帯の強さとそれを支える道徳規範に注目した。フリードマンはこうした本質主義的な宗族観への批判から出発し、「宗族が他の集団や制度との間の関係において存在するものであり、社会の中の他の複雑な連帯の網の目に依存する存在である」と主張する。それ以降の香港・台湾研究はフリードマンの関心を受け継ぎ、地域史的な研究という方向に収斂していく。1990年代以降、中国大陸の宗族復興が研究者に注目されるようになった。宗族復興について、瀬川はまず日常的な文脈と儀礼的な文脈における宗族の区別を提示し、前者は具体的な組織を伴わない個人間回路として存在するのに対して、後者

は父系出自の回路に立脚しつつも具体的集団表象を得た者たちによってのみ形成されるものであると述べている。これを踏まえ、瀬川は香港と中国広東省での調査から、香港と中国大陸の宗族の類似性と連続性を指摘し、他者との差異化とアイデンティティの確認への希求が現代宗族の存立基盤であると主張している。

2章と3章は、1章と同じく80年代以降にフィールドワークを始めた「熟年」人類学者が執筆したものである。特徴的なのは、二人の著者とも自文化を研究するネイティブ人類学者ということである。対象地域となる中国東北部と中部は、従来の宗族研究の焦点である中国東南部とは離れているが、二人とも中国東南部に関するフリードマンの議論を起点にして議論を行っている。

2章『「中国人研究者」の中国社会文化研究における宗族』では、聶莉莉は宗族を焦点にした社会と文化研究と、宗族を内容の一部とする社会・文化・歴史に関わる研究という二つの部分から、宗族研究に関わった経緯を紹介する。彼女はフリードマンと同じく宗族を「複雑な連帯の網の目に依存」するものとしてとらえ、「宗族をその背景にある社会的、文化的、歴史的な様々な制度、観念と関連付けて考察」(p.68)すべきだと主張する。前半の部分では、80年代の遼寧省での調査を通して「宗族の盛衰は、行政体制の有様に影響されるのみではなく、精神や意識の環境にも影響される」(p.71)と指摘している。これを踏まえ、公式組織への宗族組織の浸透と、国家の政治や行政の変動に引き起こされた人間関係の再編成という現象から、宗族をめぐる公的領域と私的領域の相互作用を提示する。後半の部分では、彼女は自分の研究経験から中国社会における様々な問題は宗族と関わると論じ、中国社会における宗族の重要性を逆説的に証明する。

3章「宗族制度と宗族組織」で秦兆雄は族譜に基づいて、湖北省における一宗族の発展史を記述しながら、宗族の組織化と分裂化のメカニズムについて考察する。概して、アフリカのリニージ・モデルから派生した宗族モデルは「土地財産の所有」を重視する傾向があり、フリードマンの影響で伝統的な「宗族」として理解されがちである。これに対して、秦はリニージが宗族の一形態に過ぎず、「他者との関係において、自らを集団として強く意識する」という「宗族意識」(p.93)こそ多様な宗族の共通項だと指摘している。そして、これを踏まえ、秦はリニージのような組織的宗族を「宗族組織」として名付け、「団体化、組織化された男系出自の親族集団」(p.93)と定義する。また、多様な宗族において、「宗族関係者が母方親族を区別し、父系を強調するような親族名称で呼び合い、輩行規定<sup>1)</sup>や内婚禁止などに従って行動すべきとする宗族規範」(p.93)を「宗族制度」として定義する。秦は以上の概念を用いて湖北省宗族の事例を分析して議論を進め、宗族の組織化と分裂化の要因は有力者の個人的な判断や働きだという結論を導き、「伝統的な宗族の多様性およびその機能と構造を、組織論よりも、むしろ個人を中心とする親族関係論または宗族制度論から分析すべきだ」(p.131)と宗族研究の可能性を展望している。

3章以降の各章は、2000年以降フィールドワークをはじめた「若手」人類学者によるもので、地域的に中国東南部の福建省・広東省に集中している。2章と3章が目にした帝政期と社会主義革命期における宗族の様態よりも、近年の宗族復興に関心を持っているのが3章以降の特徴である。程度の差はあるが、これらの章は宗族復興に関する瀬川(2004)の研究の影響下にあるのは明らかである。

4章「社会的住所としての宗族」の著者、小林宏至は、福建省客家社会における大規模宗族を取り上げ、

日常生活における各人の呼称に焦点を当て、宗族という父系出自の理念がどのように日常の中で表出しているかを考察する。小林はまず宗族研究の流れを概観し、「(今までの宗族研究では、)宗族の発展形態をその分裂と統合の視点から考察するということが主要な研究手法となってきたのである」(p.140)と述べる。こうした流れを踏まえ、小林は「宗族を父系出自集団という枠組みのなかに閉じ込めてしまう」(p.140)という先行研究の問題点を指摘しながら、日常的な風景から宗族を考える必要性を提示している。4章で取り上げたL村A氏では、男性の名前に限らず、女性の名前でも「輩字」<sup>2)</sup>を使うという点は、漢族社会においても特徴的である。一般的にL村内部では各自が互いに個人名を呼び合う機会が多く、その際、L村A氏の人々は呼称を聞くだけでその人物がどの系譜のどの世代にいるかがわかるのである。以上の状況に対して、小林は「呼びかけ行為の中に、系譜と世代を示す指称が内在しており、L村社会における男女すべての成員のなかで名前が呼ばれるたびに、意識的であれ無意識的であれ集団として何かが表出する『仕掛け』が組み込まれている」(p.164)と指摘し、L村A氏における各人の名前は族譜や祠堂などと同じく宗族を想起させるモニュメントとして機能していると主張している。

4章に続いて、水上居民の宗族新興を分析した論文が2本並んでいる。5章「現代中国に息づく親族組織」では、長沼さやかが広東省でかつて水上居民であった人々の祖先祭祀に注目し、現代中国において親族組織を形成する目的について考察している。広東省珠江デルタ地域では、比較的早い段階から定住した「三大民系」の人々は宗族組織を基盤とした村落で生活し、流動的な生活をしてきた水上居民を自分たちと異なる集団、すなわち非漢族とみなし、歴史・文化のない「蛋家」(ダンガ)として差別した。こうした背景の下、かつて水上居民であったM村の何氏一族はもともと共同の祖先祭祀を行う伝統がなかったにもかかわらず、2005年に祖先の墓を公営墓地に移転したことをきっかけに毎年の清明節に新たに共同の祖先祭祀を行うようになった。この事例において注目されるのは、三つの分節が共同で分節Bの始祖を祭祀していることである。出自集団では、直系ではない祖先を祭祀することがありえないという常識に反する事例として興味深い。この点について、長沼は「何氏の人々にとっても重要であるのは、祭祀の対象ではなく、祭祀という行為である」(p.191)と分析し、「親族組織に帰属することで出自を明確化し、正統な祭祀を行うことで地域社会の内部に自己を位置付けるという儀礼の社会的意味」(p.193)と指摘している。つまり、何氏一族は「正統な」祖先祭祀を通して自分を「正統な」漢族として位置づけ直すのである。

6章「現代中国の『漁民』と宗族」において稲澤努は5章と同じく、広東省における「漁民・ダンガ」の事例を取り上げるが、水上居民による宗族新興について異なる解釈を提示している。広東省汕尾(サンビ)市の「ダンガ」は、宗族を持たなかった水上居民であり、宗族のある陸上漢人に差別されたという点では珠江デルタの「ダンガ」と共通している。しかし、現代の汕尾では、「ダンガ」は政策的に漢族であるばかりでなく、陸上居住をすでに行っており陸の地元民との文化的差異はすでに見えにくくなっている。こうした状況を踏まえ、稲澤は水上居民が「正統な」漢族からの差別を避けるために宗族を作るという第5章の解釈に部分的に同意するものの、それが主に帝政期の事情で現代中国の文脈であまり有効ではないと主張している。現代の汕尾では、内陸部の四川省・湖南省からの出稼ぎ労働者が多く存在し、「ダンガ」をはじめとした地元民は清明節に帰郷しない出稼ぎ労働者を文化的に劣った存在とみなすのである。以上

の状況を踏まえ、稲澤は「(現代中国の文脈で)宗族の有無が意味を持つと考えた場合、平地の漢族と『漁民』たちとの間で意味を持たせるよりは、方言をはじめ、生活習慣や経済事情を含めた文化的に大きく異なる出稼ぎ労働者を文化的他者として設定して分析したほうがより妥当性は高い」(p.225)と指摘している。

最後に、移民母村における宗族復元・復興を取り上げる2本の論文が並んでいる。7章「現代中国における移民と宗族」では、兼城糸絵は福建省のある移民母村「龍門村」における宗族の「復興・新興」に焦点を当て、現代中国における移民と宗族の関係について考察する。「龍門村」は帝政期に都市と農村部を結ぶ流通の要所、マーケットタウンとして栄えていたが、中国の社会主義革命以降は経済構造が大きく変化し、生活がしだいに困難になった。こうした背景を踏まえ、1980年代以降多くの人は「龍門村」から海外に移住した。移民と宗族に関する先行研究では、移住先と故郷を結ぶネットワークの構築や維持という宗族の側面が注目される。こうした先行研究の議論をさらにおし進める形で「宗族復興・新興」の経済的な基盤に注目した兼城は「宗族の『復興』の原動力となったのは、故郷の事業に対する国外へ移住した人々からの積極関与と経済支援である」(p.253)と指摘している。また、村に残った人々が宗族の「復興・新興」に取り組んだ理由について、兼城は「社会的地位や威信を表現すること」と「他者との差異化を図ること」をあげている。

8章「宗族の形成、変遷そして現在」では、編者の一人である川口幸大が広東省広州市の陳氏宗族を事例に、国家と地方社会の関係において宗族が持つ意味とその研究の意義を考察している。彼は、十五世紀の珠江デルタ地域開発において形成された陳氏宗族は、「効果的に地域社会を掌握したい国家、正当な履歴を立証しつつ自らの勢力を維持拡大したい少数の有力者、そして種々の恩恵とまっとうな身分の保障にあずかりたい大多数の成員たちという三者が、それぞれの思惑を系譜の上に交叉させた所産」(p.268)と述べている。こうした宗族は中華民国期と中華人民共和国の社会主義革命期で衰退したが、1980年代から規制の緩和により再び大きな転換を迎える。この時期には、海外へ移住した者たちからの寄付により、村開祖の墓や祠堂などが修築されるようになった。川口はこうした現象を「宗族の復元」と表現し、「この時期に行われたのが、完全ではないにせよ、文字どおり、宗族をもとのかたちに戻すことだった」(p.274)と指摘している。2000年以降、国家レベルで「伝統文化」が称揚される中で、宗族が積極的に評価されるようになり、国内の成功者と地元の政府とが、海外在住者に代わって宗族に関わる種々の活動に参加するようになるという「宗族の復興」が進んでいる。以上の状況を踏まえ、川口は「中国において出自は特別な意味を持っている。これは<中略>本質性を帯びた概念として構築されてきた」(p.286)と論じ、宗族には「出自に付与された、他に代替されえない意義」(p.287)があると主張している。

本書は、帝政期から改革開放期にわたる幅広い事例を詳細に記述し、宗族を取り巻く社会状況の変化に関する民族誌的な資料を提供している。こうした意味では、本書は宗族研究者に限らず、中国研究者全般に一読をすすめた。ただ、本書は多様な視点から宗族の復興・新興を分析しているが、大部分の章は宗族の復興・新興の理由を「他者への差異化」と「歴史的なルーツの確認」に帰結させている。理論の面では編者の前著(瀬川2004)をあまり超えていないようにも見える。

また、8章でも述べられているが、今までの宗族研究は中国以外の他地域との対話に欠けていて、人類学全体の理論にはほとんど影響を与えていない。瀬川（2004）がまとめたように、「中国人の親族・家族組織についての研究は、人類学全体としてすでに親族研究が退潮に向かい始めた1960年代に本格化し、そのあと欧米の人類学者による関心が薄れてゆくなかで、日本人研究者、中国人研究者にその比重を移しながらも、今日までその主要な学術的関心対象としての地位を保ち続けている」（瀬川2004：40）。本書を含めた日本の宗族研究は、シュナイダーの親族研究批判に向き合えずに、通文化的な親族研究から離れているという意味で、他地域を研究する人類学者にとってはやや物足りないと感じられるだろう。

以上の問題点は8章においても触られている。ただし、編者は通文化的な親族研究の枠組みで宗族研究を位置付ける方向性を示すとともに、シュナイダー以降の新しい親族研究には分析が家内領域にとどまる問題点があると指摘している。評者から見れば、以上の批判はおそらく「親密圏」と「公共圏」をつなぐ宗族という編者の意図から由来したものである。その意義を否定はしないが、他の地域を視野に入れるならば、中国という複雑な社会における「親族」はむしろ特殊なものかもしれない。新しい親族研究における「つながり（relatedness）」（Carsten 2000）概念に立ち戻ってみると、宗族における血縁のない養子と養父母の親密関係はいかに構築・維持されるかなどの個人レベルの問題も興味深い。本書の言葉を借りていうと、「日常的な風景」（4章）から「実践される宗族制度」（3章）を考察する視点には、宗族を通文化的な親族研究に位置付ける可能性が潜んでいると考えられる。

## 参考文献

[1] Carsten, Janet

2000 Introduction: cultures of relatedness. In Carsten, Janet(ed.) *Cultures of Relatedness, New Approaches to the Study of Kinship*, pp.1-36. Cambridge University Press.

[2] 瀬川昌久

2004 『中国社会の人類学—親族・家族からの展望』世界思想社

## 注

- 1) 「輩行規定」とは宗族における上下関係の基準である。まず世代の基準で上下を決め、同じ世代の場合は年齢を基準に上下関係を決定する。
- 2) 「輩字」とは兄弟間で与えられる世代を示す名前の一文字である。